

博士學位論文要約

論文題目： 浅沼稻次郎の政治指導—— 「野党」 日本社会党の形成 ——

氏名： 松本 浩延

要約：

本稿の目的は、日本社会党の指導者であった浅沼稻次郎の政治指導を、とりわけ一九五一年から一九六〇年までを中心に明らかにすることである。具体的には、浅沼が政権可能な二大政党制を目指しながら、社会党を主導して政権獲得を試みていたことを初めて明らかにした。

研究背景と問題の所在

政権交代可能な野党の必要性や野党指導者の重要性は、これまで繰り返し言及されてきた。にもかかわらず、ひるがえって戦後日本政治史研究を見渡した時、野党や野党指導者の政治指導に対する研究は、与党や与党指導者に対する研究と比較して、著しく立ち遅れてきたように思われる。「なぜ野党であり続けたか」という問いによってなされてきた既存の社会党研究の多くは、党内のイデオロギー対立や労働組合を中心とした支持基盤との関係に注目して進められてきており、多くの知見をもたらしてきた。しかしながら、指導者の日記や党内会議資料といった一次史料を本格的に用い、その実態を明らかにしたものはほとんど存在していない。

以上のような研究状況を踏まえ、あらためて一次史料を仔細に検討することで、社会党内を指導し、また政権獲得を目指していた社会党指導者・浅沼稻次郎の姿が浮かび上がってきた。ひいては、そうした浅沼の姿は「五五年体制」とは異なる政権交代可能な政治体制の可能性を、たとえ小さいものであっても示唆するものであり、保守政党を中心にして行われてきた従来の「五五年体制」論に新たな光を当てるものと考えられる。そのためにはまず、「浅沼がどのようにして社会党の指導者となったのか」そして「浅沼はいかにして社会党を政権へと導こうとしていたのか」という問いに答えなければならないだろう。

浅沼の政治指導そのものに対する研究はこれまで存在しないが、戦後政治史の中では、浅沼の名はしばしば言及されてきた。政治指導者としての浅沼に対する評価は、「調停者」や「大衆政治家」に大別することができる。しかし、こうした「調停者」や「大衆政治家」といった既存の浅沼に対する評価からでは、浅沼がなぜ社会党の指導者となり得たのか、指導者として何を目指していたのかといった疑問には十分に答えられないのである。

以上のような問題点に加えて、先行研究が共通して抱えている問題は、野党指導者であることそのものに内在する論理を過小評価している点である。野党とは、政治的反対を政党政治の場において制度化したものである。そうである以上、政権党に対する「政治的反対」を高め争点化することが、自らの存在意義と支持を高めることに繋がるという、野党に固有の論理と指導者としての立場が存在するのである。浅沼が展開した政治指導に対しては、党内からしばしばこの種の「政治的反対」の強化を求める声があり、それをどのように制御していったのかという視点を抜きにして、野党指導者としての浅沼の政治指導を正當に評価することはできないのである。

本稿の分析視角

以上のような先行研究に存在する問題点を克服するため、本稿では、浅沼の政治指導を以下の三つの分析視角から検討する。

第一の視角は、政治指導者としての人格に注目する視角である。すなわち、浅沼の政治理念や人脈といった人的な要素を重視するものである。本稿は、浅沼がその政治生活において一貫した政治的信条を持ち、また構築した人脈を活用しながら政治指導を行っていた点を、浅沼の日記や論考などの史資料を活用しながら明らかにしていく。

第二の視角は、浅沼の党内指導に注目する視角である。右派對左派といった過度に単純化された視点では捉えきれない党内力学と、その中で浅沼の政治指導の実態を、社会党内部の議論を詳細に追うことで明らかにしていく。結論を先取りすれば、浅沼は、こうした派閥の力を背景に意思決定に関与する人数を少数化することで、執行部を通じて巧みに政策決定を主導していったのである。

第三の視角は、浅沼の政権獲得構想についてである。具体的には、浅沼の政権獲得構想はその時期によって三段階に分けられる。一九五〇年代の前半においては、諸野党と競争しながら自身の指導する右派社会党の勢力を拡大しつつ、時に諸野党と協力することで政権へ圧力を加え、政局を流動化させることで活路を見出そうと構想していた。だが、そうした構想が頓挫し、また限界を感じた浅沼は、二大政党制へと舵を切る。一九五五年に社会党の再統一を達成させることで、単独過半数の獲得による政権獲得を現実のものとする環境を整えながら、党内の反発を抑えつつ政治指導を展開していった。だが、一九五八年の総選挙で伸び悩み、また党内の指導体制が動揺したことで、単独過半数の獲得は短期的には困難な状況に陥る。こうした状況において浅沼は、戦前以来の人脈を通じて自民党の切り崩しによる政権獲得を模索していったのである。本稿で明らかにしていく通り、浅沼の政治指導の最大の目的は、政権の獲得であった。

本稿の構成と内容

以上のような分析視角を踏まえ、以下に本稿の構成を述べる。

まず、第一では、浅沼が本格的に政治指導を展開するまでの前史を、戦前期から遡って概観していった。続く第二～五章では、指導者となった浅沼がいかなる政治指導を展開していったのかを具体的に明らかにしていった。

第一章では、戦前期の無産政党運動の中での浅沼を扱った。普通選挙法の成立以前には社会運動家として激しい弾圧を受けながら活動していた浅沼であったが、普通選挙法成立以後は政党政治家への道を歩み始める。この間、後の自民党にまで広がる幅広い人的な繋がりが蓄積されていた点、浅沼自身に階級闘争よりも（革新）ナショナリズムを重視する思想が形成されていた点などが、戦後の政治指導の原体験となっていくことを指摘した。

また、中道連立政権期および社会党下野から分裂に至るまでの浅沼の行動も検討した。中道連立政権の一角を社会党が占め、与党社会党の書記長へと就任した浅沼が、いかにして党内の一派政治家から有力政治家へとその支持基盤を固めていったかを明らかにした。同時に、指導者となっていく浅沼が、講和・安保問題をめぐる社会党分裂時という挫折を経験したことが、その後の政治指導に大きな影響を与えた点も指摘した。

第二章では、社会党分裂から再統一に至るまでの右派社会党指導者としての浅沼の政治指導を分析した。浅沼は、分裂した社会党の中で巧みな政治技術を駆使して自らの権力基盤を維持・拡大していった。また、野党が四分五裂し、政権党に対抗する有力な政党が存在しない中、諸野党

と時に競争し時に連携しながら政権を揺さぶっていった点を明らかにする。また、自らが分裂の引き金を引いた左派社会党との統一を、いかにして成し遂げたのかといった点も明らかにした。

第三章では、「五五年体制」成立から初めての総選挙に至るまでの浅沼の政治指導を明らかにする。この時期の浅沼は、成立した指導体制をフルに活用して党内の異論を抑えながら、社会党を国会の場で政策論議を行う政党へと指導していた。これは、政権担当能力を示し得票を最大化させる戦略であったと位置づけられるのである。

第四章では、総選挙での「伸び悩み」から指導体制が揺らぎ、再分裂に至るまでの時期の浅沼の政治指導を明らかにする。中国との国交回復への積極的な関与と、日米安保改定に対する反対、それに伴う院外大衆運動との連携を、反対の争点化と政権獲得戦略における分断戦略として位置づけられることを論じた。

第五章では、委員長就任後の浅沼の政治指導を明らかにする。浅沼が委員長に就任した後、党内の動揺は収束へ向かう。いかにして混乱を収束し、挙党体制を維持しつつ、安保闘争を通して自民党内の分断を誘い、野党連合を形成しようと試みていたのかを、一次史料を用いて明らかにした。

史資料について

本稿で活用した史資料に関して述べる。党編纂の史資料や各種評伝などの資料はもちろんのこと、浅沼と特に懇意であった新聞記者である宮崎吉政による『宮崎吉政日記』や浅沼の属していた河上派の派閥資料である『資料社会党河上派の軌跡』、また近年公刊された『河上丈太郎日記』や浅沼が死ぬまで社長を務めていた『日本社会新聞』なども積極的に活用した。また、未公刊史料に関しては、国立国会図書館憲政資料室所蔵の「浅沼稻次郎関係文書」や衆議院憲政記念館所蔵の「浅沼稻次郎遺品」および法政大学大原社会問題研究所所蔵の「鈴木文庫」内の史料や浅沼発翰の書翰類を初めて本格的に活用した。

とりわけ憲政資料室所蔵の「浅沼稻次郎文書」内には、浅沼自身の手によって断続的に執筆されていた戦前期を中心とする日記が収められている。こうした浅沼の日記を丹念に読み込むことで、浅沼自身の思想や理念が浮かび上がる。また、特に戦後期を中心として社会党内部の会議や議論などに関する膨大なメモ類も存在している。こうした一次史料を使用することによって社会党内部の権力構造の実態とその中で展開されて浅沼の政治指導を明らかにした。

こうした手法を用いることで、これまでオーラル・ヒストリーや党史などを中心にして構成されがちであった社会党研究に対して、新たな知見を提供することも可能となるのである。